

第2部に入る前に

立花隆と「冷戦」「戦後」

私は、ツアーの前のベルリンから立花先生と合流していたので、本来は、ベルリンの訪問記を書いてから、アウシュビッツのことを書いたほうがよかったかもしれません。

しかし、今回の旅行のメインはあくまでポーランドのアウシュビッツツアー。というわけで、第1部ではツアー初日のクラカウから入りました。

けれども私は、先生を通して、ベルリンでもうひとつの戦争の歴史をみたことに、いまになって気づいています。

「冷戦」という戦争です。

立花先生はアウシュビッツツアーの前後で精力的に欧州を回られています。そのときの旅程をあらためて振り返ると、先生が回ったのは旧共産圏です。いまでは中欧とも呼ばれる地域。

出発前に先生にどこに行きたいかを伺ったとき、先生はこうおっしゃいました。

「ドレスデンがどれだけ変わったか、見てみたい」

「ベルリンからポツダムに行けるの？日本の戦後が決まったところを見たい」

そう、先生は、壁のあった時代のドイツを旅されているのです。

いまではそのベットタウンとして、ベルリンと気軽にアクセスできるポツダムは、当時は往来困難でした。

さらに、ベルリンに到着した先生が、まっさきに行きたいと希望したのは、ブランデンブルク門から続く大通り、ウンター・デン・リンデン。旧東ドイツのメインストリートです。

立花先生にとって東欧の旅は、「冷戦」の歴史を再確認する作業だったのかもしれませんが。そしてあらためて振り返ると、

私は立花先生と一緒に「冷戦」と「戦後」の歴史を旅した、と思うのです。

記憶のなかにある共産圏の姿を、今の風景に重ねあわせ、語った先生。

その先生の傍らにすることで、私も冷戦時代の様子がまざまざと思い描けたからです。

そして、現在につながる冷戦の「禍根」に思いをはせることにも。

そのような貴重な体験を残さないわけにはいかない、
そう思い、さらにペンをとることにしました。
立花隆と見てきた「冷戦」が、少しでも伝わればと願います。